大問一

『私とは何か「個人」から「分人」へ』

《著者紹介》

平野啓一郎（ひらの　けいいちろう）

一九七五年、愛知県生まれ。小説家。京都大学法学部卒。一九九九年、在学中に文芸誌「新潮」に投稿した『日蝕』により第一二〇回芥川賞を受賞。以後、二〇〇二年発表の大長編『葬送』をはじめ、数々の作品を発表し、各国で翻訳紹介されている。著書に『滴り落ちる時計たちの波紋』、『決壊』、『ドーン』などがある。

『わかりあえないことから―コミュニケーション能力とは何か』

《著者紹介》

平田オリザ（ひらた　おりざ）

一九六二年、東京都生まれ国際キリスト大学在学時代に劇団「青年団」を結成。現在芸術文化観光専門職大学学長。二〇〇二年度から採用された、国語教科書に掲載されている平田のワークショップの方法論により、多くの子どもたちが教室で演劇を作るようになっている。戯曲の代表作に『東京ノート』・『日本文学盛衰史』がある。著書に『演技と演出』・『２２世紀を見る君たちへ』がある。

問一　漢字の書きの問題

常用漢字を書く基本的な問題。日々使用する言葉を正しく書くということは必要な能力である。

問二　適語補充の問題

空欄はそれぞれどのような接続詞が入るかを問う問題。前後の文章を読み適切な語を入れる必要がある。

Aは付加の意味を持つイ（また）が正解である。不当に貶める錯覚と双方向性でない印象を与えるの部分の意味が類似しており、選択肢の中で付加の意味合いを持つのはイ（また）のみである。

Bは逆説の意味を持つオ（しかし）が正解である。Aの部分では主体的に決めると硬直的である。と述べているが、Bの文章ではコミュニケーションを通じて関係性が変化するがそれを流動的に変容するのは無理があるとの出ているため逆説となる。Cはエ（そして）が正解である。Bでは「仮面が変容したと説明することや、仮面を付け替えたるという説明は無理がある」と述べており、Cではすべて本当の自分と説明しているので累加・添加の意味が適切である。

問三　内容理解の問題（文部科学省が「個性の尊重」を掲げるようになった理由を解く問題。）

キーワードとしては「個性の尊重」と文部科学省が提言しているため「教育現場」においてである。この二点が合致している文章は「教育現場で個性の尊重が叫ばれるのは将来的に個性と職業とを結び付けなさいという意味である」の部分である。この部分が最も直接的に表現されているため答えは「将来的に、個性と職業とを結び付けなさいという」（目的のため）となる。

問四　内容理解の問題（「職業選択の義務」と「個性」とはどのような関係性があるかを問う問題。）

「社会は分業化（職業の多様化）しており、数多ある個性の中で、その個性に適した役割（職業）を担う必要がある。」と記載がある。それが職業選択の自由であり、一種の義務でもある。これらを吟味すると「社会は分業化している」・「個性に応じた役割を担う必要がある」と記載のあるウが正解。アは職業選択をする際は自由があるという点が不適当、イは個性に応じた職業に従事するだけでは説明不足、エは職業の多様化が限定的という点が不適当である。

問五　空欄補充の問題

文章Aの冒頭部から適語を抜き出す問題。

人間はいくつもの顔があるため「個人」ではなく「分人」であることが記載されている。(3)では本

「当の自分は一つしかない。しかしこの考えは間違っている。」と記載があり、実体がないとも言い換えることができるため「本当の自分」が正解である。

問六　内容理解及び共通点抜き出しの問題

文章Ａでは「数多くある個性を将来職業に結び付けて伸長することが求められる。」ことが述べられている。また、個性は一つかつ限定的なものではなく、様々な顔を持っていることも述べられている。多様化する個性の中でその個性を生かせる職業に就くことが求められる。

一方文章Ｂではコミュニケーション能力について述べられている。一様にコミュニケーション能力の有無について述べられているわけではなく、社会生活を営む術を育むためにコミュニケーション能力の育成が必要である。そのため、コミュニケーション能力の多様性の中でその人に適した教育が必要になる。このことから共通する点は「多様」であることが言える。

問七　表現上の特徴及び全体要約の問題

本問題は文章Ａと文章Ｂを並行して読み、どのような効果・特徴があるのか、共通点や相違点があるのかを考察する必要がある。「個性とはなにか」・「コミュニケーション能力とはなにか」を述べていることは明白である。その中で文章Ａ・Ｂを共通して結論つけるにはどのようなことが言えるか問うている。文書Ａではいかなる場合も本当の自分であり、その個性を将来職業と結びつける必要があると述べている。一方で文章Ｂでは多様化するコミュニケーション能力は生きていく術を伸長する必要があると述べている。いずれも社会生活との結びつけが求められている。以上から考察すると答えはウになる。アは「個性」と「コミュニケーション能力」を対比しているとあるがそれは不適当である。イはコミュニケーションを中心とした世の中が形成される点が不適当である。エは文章Ｂは文章Ａの付随的役割ではなくそれぞれ独立した文章のため不適当である。

大問二

「銀河鉄道の父」

《著者紹介》

門井慶喜（かどい　よしのぶ）

１９７１年群馬県生まれ。同支社大学文学部卒業。２００３年、第４２回オール讀物推理小説新人賞を「キッドナッパーズ」で受賞しデビュー。２０１５年に「東京帝大叡古教授」が第１５３回直木賞候補、２０１６年に「家康、江戸を建てる」が第１５５回直木賞候補となる。２０１６年に「マジカル・ヒストリー　ミステルト美術で読む近代」で第６９回日本推理作家協会賞（評論その他の部門）同年に第３４回咲くやこの花対象（文芸その他部門）を受賞。他の著書に、「パラドックス実践雄弁学園の教師たち」「屋根をかける人」「ゆけ、おりょう」、共著「決戦！新選組」などがある。

問一　適語補充の問題

文章の展開の論理をとらえて読解できる力が問われる問題。

空欄は、直前の「励ましたところで賢治はみじんも楽になることはなく、」を受け、後の「病状は好転しない」につなげる語を入れなければならない。病気の賢治の状態は、父親の励ましではみじんも楽にならないのは当然のこと、病気の好転などというのは「言うまでもなく」無理なことである。という展開にするのに、同義の副詞「まして」を入れるのが正解。

選択肢アしかし（逆接）イすると（原因・結果）ウむしろ（対比）エそれどころか（添加）では文意が通らないため不正解。

問二　表現技法の問題

擬態語は状態を描写するものであり、空欄Ｂでは、賢治の頭が枕に着地する際の様子を描いている。ここでの賢治の様子を作者がどのように表現するかというのは、前までの表現と照らして考える。直前に、「賢治はぐったりと背をまるめ、紙を敷くようにしてあおむきになった。」と描写されている。「紙を敷くように」という比喩から、賢治の体が重さを感じないほどに弱弱しい様子が想像できる。その表現をうけて、枕が頭につくときの擬態を選択すると、アかさりとが正解。

問三　表現とその効果の問題

「たしかに瞳は、かがやきを増した」には、暗喩が使われている。「瞳がかがやきを増した」は父親の言葉を聞いた賢治の前向きな気持ちの変化や、生きる力が湧いたことを表している。瞳が、原稿を書く紙が入っているトランクを見て、「んだが。んだすね。」と言った声に「底が入っている」（強い気持ちがこもっている）のは、また書けるという気持ちになったことが読み取れる。また、父親がその目の光に、子どもの頃の元気な賢治を彷彿とさせられたところからもうかがえる。よってイが正解。

アは擬人法が誤り。ウは賢治の気持ちがほんのわずかであったが誤り。エは父親の愛情深さを暗に表現しているが誤り。オは賢治が子供の頃の気持ちがよみがえっているわけではないので誤り。

問四　内容理解の問題

目の動きが丁寧に描写されている本文では、病床で寝ていることしかできない賢治の心を表す重要な箇所であることに気づき、読みとることが必要である。また、目の表現は心理を表す表現として多く使われる。父親の言葉やその他の描写と合わせて正しく読むことが重要。

アは謝罪する父親に対して、「とんでもねえ」とその言葉を遮り、続けて父親への感謝の言葉を述べているため正解。イは大きな発作に襲われながらも、感謝の言葉を言い切ろうとしている。父親をじっと見つめている様子からも正解。ウは「まばたきした」は、驚きを表す表現。父親の言動が賢治にとっては意外だったことを表現しているので正解。エは「目を見開いた」が驚きを表現するが、これは叱責や叩かれたことへの動揺ではなく、父親の「～人間は、寝ながらでも前が向ける」という言葉に、あきらめの気持ちから目を覚まされたような驚きである。よって説明の誤りがあるのはエ。

問五　内容理解の問題

政次郎がようやく気がゆるんだのは、賢治に子供の頃にあったような目の光がもどったためである。当初は賢治の願いを聞き入れなかった自分に後悔し、謝罪していたのが、賢治を叱咤し、賢治をまだ詩作に向かわせたものは、「父親の業」である。

問六　表現上の特徴の問題

本文は、隠喩や直喩などの比喩が多用されている。賢治の咳がいかに苦しかったかを「砲声」、結核の為、口から血が咳とともにほとばしって布団に飛んだ様子を「Ｖの字なりの赤い点々」などと描写することで、まるで眼前で病床を見守るかのように読者を引き込む。よってエが正解。

アは故郷の方言が親子の会話を本音であることを示す効果があるとはいえない。イは本音をだせない苦悩が誤り。ウは言いたいことがいえないもどかしさが誤り。オは宮沢賢治作品を想起させる効果があるとはいえないため誤り。

大問三

古文

《作品紹介》

「十訓抄」

鎌倉時代の説話集。〈じっくんしょう〉とも。のちに出家して智眼（ちげん）と名のり、六波羅二藤左衛門（ろくはらにとうさえもん）入道とも呼ばれた湯浅宗業（むねなり）が、まだ京都六波羅に仕えていたころに執筆したもの、と推測されている。善きことをすすめ悪しきことをいましめて、少年たちが思慮分別をつける縁としようとした、と書かれる。十ヵ条の教訓をかかげ、それぞれの教訓を守った例、教訓にそむいた例を和漢にもとめ、説話を例証として説明する。

説話は教訓の例証としての枠を忠実に守り、叙述に生彩を欠くが、通俗的な教訓が平易に説かれていることが中世・近世には歓迎されて多くの読者を得、また、近代にも読みつがれた。

「改訂新版・世界大百科事典・出雲路 修」

「孔子家語」

孔子の言行、逸話を集録した書。略して『家語』ともいう。『漢書（かんじょ）』芸文志（げいもんし）の六芸（りくげい）略論語類には、撰者（せんじゃ）不明の『孔子家語』二十七巻が記載されている。

問一 歴史的仮名遣いの問題

歴史的仮名遣いを正しく読む基本的問題。音読は効果的な学習方法である。長音なども正しく読む練習は必須。

問二 比喩の問題

比喩は文章読解の着目ポイント。何を何に例えているか正しくとらえ、筆者の伝えたいことを的確にとらえる上で重要。

「麻」はうるはしくうちある人→善人

「蓬」は心の悪しき人→悪人

問三 内容理解の問題

麻の中で育つ蓬の喩えのように、曲がって伸びる余地がないため、まっすぐ伸びることになる。蓬は本来の伸び方と違うが、まっすぐ伸びるしかない。という点からウが正解。

問四 内容理解の問題

傍線部③「心は朋友にならふ」の「朋友」とは、友人、特に志を同じくした同門の友を指す場合に用いられる。人の心は、その入れ物に従い、変わっていくことが前述されており、それを受け、「どうして友を選ばないでいられようか。」と続く。共に過ごす友人に倣い、人は変化していくことから一行目に「人は良き友に会はむことをこひねがふべきなり」と筆者は述べている。「朋友」が指すのは、「良き友」である。

問五 内容理解の問題

ここまでの本文で喩えられている内容が理解できているかを問う問題。反語表現のアが正解。「どうして友を選ばないでいられようか」とは、つまり、「友を選ぶべきである」ということ。冒頭の言葉と一致する。

問六

（1）文学史の問題

中学校で学習する「論語」は、孔子の言行を弟子がまとめた書である。

（2）内容理解の問題

生徒Eが正解。

生徒Bは、「周りの教えを素直にきくので」が不正解。共に過ごす人によって自然と良い方向へ変化していくということを孔子は重視している。

生徒Cは自分より優れた人といることが「厳しい環境」とは本文に記載のない内容なので不正解。劣等感をもつか否かは問題としていない。

生徒Dは「劣った人の中でリーダーになっても幸

せになれない」が誤り。
生徒Eは「不善の人を居るは、鮑魚(ほうぎょ)の肆(し)に入るが如し。」の意をきちんととらえている。独善的になれば、成長はないということを孔子は危惧しているのである。

（3）内容理解の問題
香草が置いてある部屋に長い間いると、そのよい香りを感じなくなるといくことを孔子は、「即ち之と化せり」として、結論として「自分とその香草の香とが同化してしまったのだ」と述べている。「同化」が正解。

（4）内容理解・故事成語の問題
「朱に交われば赤くなる」を挙げている生徒Hが正解。
朱に交われば赤くなる→交わる仲間や友人によって感化されることのたとえ
水魚の交わり→離れることができない、親密な間柄や交際のたとえ。
出藍の誉れ→弟子が師よりもすぐれた才能をあらわすたとえ。

《現代語訳》
「十訓抄」第五　朋友を選ぶべき事

ある人が言うには、「人は良き友と出会うことを、心より願うべきである」「まっすぐ生える麻の中に育つ蓬は、矯めなくても、自然とまっすぐ生長する」という喩えがある。蓬という草は伸び方はまっすぐではないが、麻の間に混じって生えていると、曲がって伸びる余地がないゆえ、不本意ながらまっすぐ伸び育っていくのである。心のねじけた人であっても、正しくきちんとした人の中に交じっていると、そうはいってもやはりあれころれと気遣うことが多くなり、自然と正しくなるものである。

こういうことから、良い友に出会うことを、経典でも説き、書物の中でも勧めている。『顔氏家訓』では、「善人というのは、芳しい芝蘭の草の部屋に入るのと同じだ。長くいれば、自然と芳しくなる。悪人といるのは、生臭い干し魚の店に入るのと同じだ。長くいれば、自然と生臭くなる」と述べている。また、ある書には、「人の心は水が容器の形に従うようなものである、容器が細長ければ、水はそのまま細長くなり、容器が円ければ、水はそのまま円くなる。心は友に倣い従うものである。どうして友を選ばないでいられようか」と書いてある。また、『九条殿遺誡』では、「大声を出して荒れ狂う人と、一緒にいてはいけない」とも教えられている。

それゆえ、軽く話を交わすような友であっても、よくよくその人柄を選び選び抜くべきである。「良い香りの草と、くさいにおいの草は、別々の器に入れなくてはいけない」というわけである。桜の花の下、春の季節のみに出会うことを約束した友、名月の夜、たった一夜のみに出会う友であっても、やさしく、美しい心を持った友は忘れがたく、いつまでも思い出に残るものである。